

一流選手から学んだことどう生かす

# 勝利に導ける捕手に

「井川さんでも、すごく考えて投げてるんです。僕らのレベルだったら、もっと一球一球を意識しないと」

野球の独立リーグチーム「兵庫ブルーサンダーズ」(フルサン)の正捕手。昨シーズンは、プロ野球阪神などで活躍した井川慶投手(38)とバッテリーを組んだ。

岡山市出身。小学2年でソフトボールを始め、中学は地元硬式野球チームでプレーした。岡山城東高校では3年のときに主将を任された。甲子園出場はならなかったが、

## 兵庫ブルーサンダーズ選手

### 木山 裕貴 さん(23)

「肩が強いから上までいける」という監督の言葉が自信になり、京都教育大学でも野球を続けた。

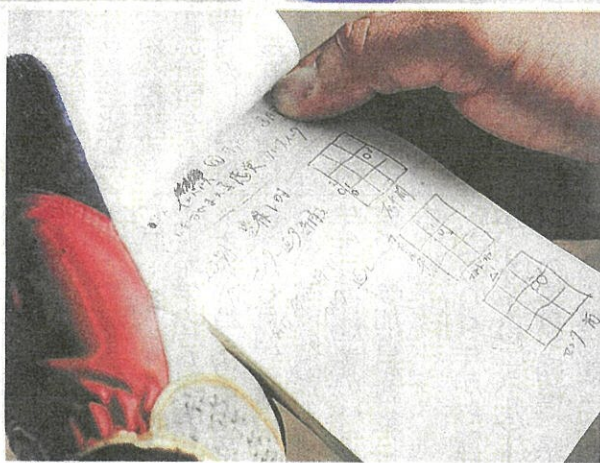
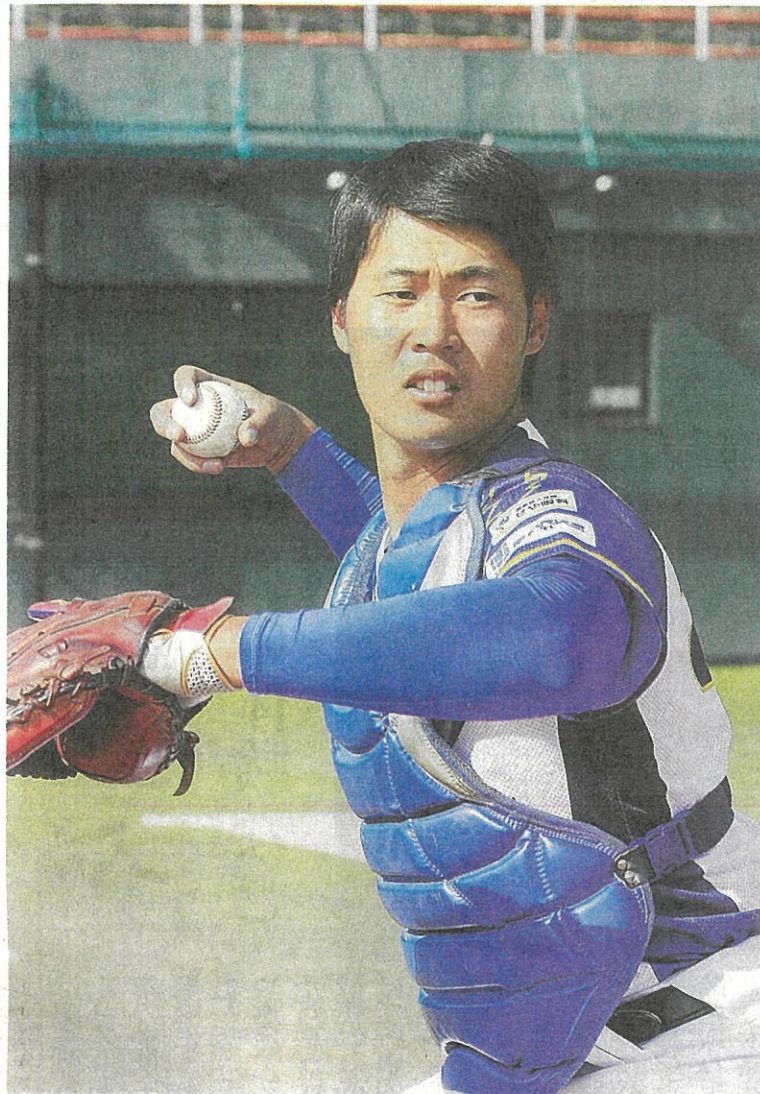
大学には甲子園を経験した選手もおり、レベルの高い仲間たちと投手の配球などを追究するうちにプロへの思いが強くなった。友人が就職活動に取り組む中、知り合いを通じて元フルサンで現巨人の山川和大投手(23)にフルサンを

紹介してもらった。無給だが、「後悔するより、今しかできないことをやりたい」と飛び込んだ。

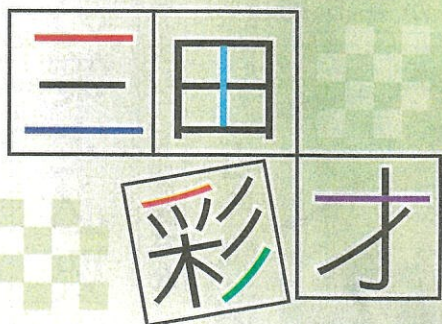
2017年に入団。井川投手も一緒にになり、驚いた。初めて球を受けた時は緊張したが、それ以上にマウンドで勝負する姿が勉強になった。内角に構えれば、狙ったように重い直球がミットに収まる。ファウルを誘うストライクの

取り方も計算されていた。「一球一球、意味のある球なんです。中途半端ではだめだと思いました」

試合後には話し合いを重ね、意見を求められた。「さっきの球は打ち損じてくれたけど、プロなら打たれるよ」。厳しい言葉に耳を傾け、練習を続けることで少しずつ実力が付いた。これまで決まっていたパターンの配球しかできな



素早く二塁へ送球する木山裕貴捕手  
①練習や試合での反省をメモに残すのは日課。配球などが細かに書かれている。いずれもアメニースキップースタジアム



ったが、井川投手のアドバイスで配球の幅が広がり、投手の直球や変化球の状態まで考えられるようになった。

昨年は数球団のスカウトに注目されたが、けがで力を出し切れなかった。今年の目標はドラフト会議で指名を受けたい。

「年齢的にも勝負の年。ドラフトで指名されて、チームを勝たせられる捕手になりたい」  
(山脇未菜美)

### 取材後記

豆だらけの手で一冊のメモ帳を見せてくれた。中には練習や試合での振り返りや反省点、自分が打席に立った時の配球などが書かれている。「捕手がしっかりとこなして、投手を勝たせられないですから」。こつこつと重ねた努力が実り、ドラフト会議の日に胸上げられる姿が見たい。